

本書の特色

この本は、中学3年の冬休み前までの学習内容を中心につくられたテキストです。基本的な力をつける問題が中心になっていますから、今まで学んだことの基礎を身につけるために効果的です。

読解の単元は、最初の2ページで文章中にどんなことが書かれていたかをおさえたとともに、次の2ページで、同じ文章を扱った確認問題に取り組むという構成になっています。同じ文章を二度読むことで、内容を正確に読み取る力をつけましょう。さらに次の2ページで、確認問題の類題に取り組むことで、各課で扱う内容を着実に身につけることができます。

本書の使い方

- **学習のポイント**……各課で習得すべき学習内容が示されています。
 - **文章の流れをつかもう**……文章のあらすじをおおまかにつかむコーナーです。
 - **内容をとらえ直そう**……文章の内容を整理し直すコーナーです。
 - **確認問題**……前の2ページと同じ文章を扱っています。「文章の流れをつかもう」「内容をとらえ直そう」で確認した内容を思い出しながら解きましょう。
 - **演習問題**……「確認問題」とは違う文章で、同じレベルの問題を扱っています。
 - **漢字のトレーニング**……重要漢字の読み書きを確認しましょう。
 - **入試実戦問題**……入試問題による、この本の総まとめになっています。
- ※ **読解以外の単元**……「整理しよう」「例題」を通して重要事項をおさえ、「演習問題」でさらに理解力を深めましょう。

もくじ

〈中3国語〉

1	説明的文章(1)	2
2	説明的文章(2)	8
3	小説文(1)	14
4	小説文(2)	20
5	随筆文	26
6	古典	32
7	詩歌	38
8	情報・作文	44
	漢字・語句・文法	50
	入試実戦問題①(説明的文章)	54
	入試実戦問題②(文学的文章)	56
	入試実戦問題③(古典・詩歌・情報)	58

6 古典

学習のポイント

- ・歴史的かなづかいを現代かなづかに直す。
- ・省略された主語や、会話を的確にとらえる。
- ・返り点と送り仮名を理解する。

整理しよう

1 かなづかいの直し方

- ①は・ひ・ふ・へ・ほ↓わ・い・う・え・お (※語頭と助詞をのぞく)
 例 かは↓かわ(川) うへ↓うえ(上)
- ②ゐ・ゑ・を↓い・え・お
 例 ゐど↓いど(井戸) こゑ↓こえ(声)
- ③ア段音+う↓オ段音+う
 例 やうす↓ようす(様子) まうす↓もうす(申す)
- ④イ段音+う↓イ段音+ゆ
 例 りうは↓りゅうは(流派) かしふ↓かしゅう(歌集)
- ⑤エ段音+う↓イ段音+よう
 例 けふ↓きよう(今日) てふ↓ちよう(蝶)
- ⑥ぢ・づ・くわ・ぐわ・む↓じ・ず・か・が・ん
 例 みづ↓みず(水) くわし↓かし(菓子)

2 主語のとらえ方

- ①省略されている「は」「が」をおぎなう。
- ②「が」の意味で使われている「の」をさがす。
- ③前後の文脈から判断する。

3 会話のとらえ方

- ①会話部分は「と」「とて」「など」といった引用を表す語の直前まで。
- ②会話部分の前後に、「言ふやう、〜と言ふ」「申すやう、〜と申す」など、「言ふ」「申す」という言葉が繰り返し用いられていることも多い。

4 漢文↓書き下し文への直し方

- ①返り点……レ点……一字下から上へ返る。 ② ①
- 一二点……二字以上、下から上へ返る。 ③ ① ②
- ②送り仮名……右下のカタカナはひらがなに直す。
- ③その他……「不」は「ず・ぎ」と読み、ひらがなに直す。
- 「而・於」など、読まない字は書き下し文には書かない。

例題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多ク旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えむと、そぞろ神の物につきて心をくらはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

表八句を庵の柱に懸け置く。

(松尾芭蕉「おくのほそ道」より)

(注) 百代：永遠 江上の破屋：隅田川のほとりのあばら家

そぞろ神：人の心を惑わせる神 道祖神：道路の守り神

杉風が別墅：芭蕉の古い弟子(杉山杉風)の別荘

表八句：百句続ける連句の初めの八句

□(1) 線①「くわかく」、②「とらへて」を現代かなづかいに直しなさい。

①

②

□(2) 線③「越えむ」の口語訳として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 越える イ 越えない ウ 越えまい エ 越えよう

□(3) 線④「住めるかたは人に譲り」とありますが、その他にどのような旅支度をしましたか。その様子を表している部分の最初と最後の三字を、

文章中から書きぬきなさい。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

□(4) 次の文のA、Bに入る最も適当な言葉を、文章中から書きぬきなさい。また、Cに入る最も適当な言葉を、ア～エから選びなさい。

作者である芭蕉は、人生そのものをAであるのとらえ、尊敬するBの生き方を思い、自分を見つめ、「おくのほそ道」のようなC文を書き、推敲を重ねた。

- ア 紀行 イ 日記 ウ 物語 エ 随筆

A

B

C

兵 刃 既^ニ接^シ、棄^テ甲^ヲ曳^{キテ}兵^ヲ而^ハ走^ル、或^ハ百^ニ步^{ニシテ}而^ハ後^ニ止^{マル}。

或^ハ五十^ニ步^{ニシテ}而^ハ後^ニ止^{マル}。以^テ五十^ニ步^{ニシテ}笑^フ百^ニ步^{ニシテ}則^チ何^カ如^ク。

【書き下し文】 兵刃既^ニに接^セし、走る、或^ハは百^ニ歩^{ニシテ}にして後^ニ止^マる、或^ハは五十^ニ歩^{ニシテ}にして後^ニ止^マる。五十^ニ歩^{ニシテ}を以^テ 則^チ何^カ如^ク。

【口語訳】 戦場で両軍すでに戦う時に、兵士たちはよろいを捨て、武器を引きずり逃げ出した。ある者は逃げた後、百歩で立ち止まり、ある者は五十歩で立ち止まった。五十歩逃げた者が、百歩逃げた者をののしり笑ったとすれば、どうであろうか。

(『孟子』より)

□(1) 線①「棄^テ甲^ヲ曳^{キテ}兵^ヲ」②「笑^フ百^ニ歩^{ニシテ}」を書き下し文に直しなさい。

①

②

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人に存するものは、眸子①より良きはなし。眸子は、其の悪を掩おほふことあたはず。胸中正しければ、則ち眸子あき瞭すならかなり。胸中正しからざれば、則ち眸子②。其の言を聴きて、其の眸子を觀みれば、人焉③くんぞ隠さんや。
〔孟子〕より

(注) 人に存するものは…人に備わっているものでは 眸子…瞳
 掩おほふことあたはず…おおい隠かくすことができない

□(1) □に入る最も適当な言葉を、ア～エから選びなさい。

- ア 安らかなり イ 近し ウ 澄すめり エ 暗し

□(2) —線①「眸子より良きはなし」の現代語訳を書きなさい。

□(3) —線②「其の眸子を觀れば」は、漢文では「觀其眸子」と書いてあります。この漢文に返り点をつけなさい。

觀 其 眸 子

□(4) —線③「焉くんぞ隠さんや」は、「隠すことができない」という意味ですが、何を隠すことができないのですか、文章中から二字で書きぬきなさい。

□(5) 本文の内容に最も近い慣用句を、ア～エから選びなさい。

- ア 目は心の鏡 イ 目の色を変える
 ウ 目から鱗うろこが落ちる エ 目に入れても痛くない

3 次の漢詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

	江雪 <small>こうせつ</small>		柳宗元
千	山鳥飛 <small>フコト</small> 絶 <small>エ</small>	千	山鳥飛ぶこと絶え
万	径人蹤 <small>しよう</small> 滅 <small>ス</small>	万	径人蹤滅す
孤	舟蓑 <small>き</small> 笠 <small>りょう</small> 翁 <small>おうち</small>	孤	舟蓑笠の翁
独 <small>り</small>	釣 <small>つ</small> 寒 <small>かん</small> 江 <small>こう</small> 雪 <small>せ</small>		

(注) 万径…すべての小道 人蹤…人の足あと
 蓑笠…「みの」と「かさ」(ともに雨や雪を防ぐもの)

□(1) この漢詩の詩型を、ア～エから選びなさい。

- ア 五言絶句 イ 五言律詩
 ウ 七言絶句 エ 七言律詩

□(2) □にあてはまる、—線「独り釣つ寒かん江こう雪せ」の書き下し文を書きなさい。

□(3) この詩にはどのような情景が描かれていますか。最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア しんしんと雪の降り続く朝、旅立つ友人を見送っている情景。
 イ 故郷を離れた旅人が、雪山を眼前に一人たたずんでいる情景。
 ウ 見渡すかぎりの雪景色の中で、小舟が小川を行き来する情景。
 エ しんしんと降る雪の中、老人が川で一人釣りをしている情景。

4 次の漢詩と書き下し文、古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

I 有梅無雪不精神^①

梅有りて雪無ければ精神ならず

有雪無詩俗了人

雪有りて詩無ければ人を俗了す

薄暮詩成天又雪

薄暮詩成つて天又雪ふる

与梅併作十分春

梅と併せ作す十分の春

(方岳「雪梅」より)

II 梅は白き、薄紅梅。一重なるが疾く咲きたるも、重なりたる紅梅の匂ひめでたきも、皆をかし。遅き梅は、桜に咲きあひて、覚えおとり、けおされて、枝にしほみつきたる、心憂し。
(「徒然草」より)

有 梅 無 雪 不 精 神

□(1) — 線①「有梅無雪不精神」に返り点をつけなさい。

□(2) Iの漢詩の三句・四句について、次のように説明するとき、□ A、

Bにあてはまる言葉を、それぞれIの漢詩の中から一字で書きぬきなさい。

薄暗くなり、詩ができあがった頃に再び雪が降り出し、梅と□ Aと□ Bとがそろって、十分に春の趣をかもし出しています。

A

B

□(3) — 線②「けおされて」は「相手のすばらしさに圧倒されて」という意味です。ここでは何が、何に、けおされるのですか。次の□ A、Bに

あてはまる言葉を、それぞれIIの文章中から書きぬきなさい。

□ A が、□ B に、けおされる。

A

B

□(4) Iの詩とIIの文章の内容に、最もよく合っているものはどれですか。ア

イ 工から選びなさい。

ア 人と自然の一体感が大切だという教訓を述べている。

イ 自然の豊かさ人と人間のはかなさについて述べている。

ウ 鋭敏な視点でとらえた春の風情について述べている。

エ 春の景色は盛りを過ぎた頃こそ美しいと述べている。

5 次の和歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひ □ 紀貫之

B わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも □ 大伴旅人

(注) いさ…さあ、どうであろうか

□(1) Aの和歌の□に入る言葉として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

ア けら イ けり ウ ける エ けれ

□(2) Bの和歌から枕詞を書きぬきなさい。

6 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

むかし、二条の后（むすめ）に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつるを、つねに見か
はして、よばひわたりけり。^①

「いかでものごしに^②対面して、おほつかなく思ひつめたること、すこしはるか
さむ」といひければ、女、いと忍びて、ものごしにあひにけり。物語などして、
男、

③ ひこ星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ

この④にめでであひにけり。

〔伊勢物語より〕

〔注〕二条の后：藤原長良女。清和天皇の后

女の仕うまつるを：后にお仕えしている女を

見かはして：顔を見合わせて よばひわたりけり：求婚し続けていた。

いかで：何とかして おほつかなく：待ち遠しい気持ちで

はるかさむ：晴れやかにしたいものです めでて：心ひかれて

□(1) 〓線「あひにけり」を現代かなづかいに改めなさい。

□(2) 〓線①「よばひわたりけり」の主語として適当なものを、ア～エから
選びなさい。

ア 二条の后 イ 男 ウ 女 エ ひこ星

□(3) 〓線②「いかでものごしに対面して」とありますが、男のどのような
心情を表現していますか。最も適当なものを、ア～オから選びなさい。

ア 「后」に対する忠誠心が本物であることを示そうと必死になっている。

イ 「后」に対する思いをどうすることもできず、恋にもだえている。

ウ 「后」に対する思いをどうすることもできず、恋にもだえている。

ウ 「女」を求めるあまり、我を忘れて物事の分別がつかなくなっている。
エ 「女」の自分に対する気持ちの本物なのかどうかを確かめようとして
いる。

オ 「女」に会いたいという、募り募った強い恋心をおさえきれずにいる。

□(4) 〓線③「ひこ星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ」
について答えなさい。

A 「ひこ星」は日本の七夕に深い関係がありますが、七夕が行われている
月の異名を、ア～シから選びなさい。

ア 弥生 イ 卯月 ウ 如月 エ 水無月

オ 葉月 カ 皐月 キ 師走 ク 神無月

ケ 睦月 コ 文月 サ 霜月 シ 長月

B この歌では「男」のどのような気持ちを伝えようとしていますか。最
も適当なものを、ア～オから選びなさい。

ア 自分に会おうとしてくれない「女」に対して憤っているということ。

イ 「女」への深い愛情が、今や冷めてしまったということ。

ウ 「女」に対する強い恋心を受け止めてもらいたいということ。

エ 機嫌を悪くした「女」の気持ちを何とか元に戻そうということ。

オ しばらく会っていないかった「女」に恋心を抱いているということ。

□(5) □(4)に入る言葉として最も適当なものを、ア～オから選びなさい。

ア 歌 イ 天の河 ウ 物語

エ 女 オ 二条の后